

# フィールド風

(現場)からの

宮田守男

11月下旬、政党掲示板に新しいポスターが張り替えられた。衆議院選挙が1月解散かと強く思わせる。新型コロナウイルス患者向け

の病床使用率が感染急増の指標となる25%以上になったとする都道府県が増え、日増しに病床ひっ迫の懸念が高まる。政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会の尾身会長は「人々の個人の努力に頼るステージは過ぎた」として、

国民が求めている問題点とは、かけ離れ、自らの議席確保しか念頭にないのかと疑ってしまふ。もしこれが、自民党が仕掛けた論点外したとすれば、この国の将来が心配になってしまふ。

まい、皆の心から余裕が消えてしまふ。しかし貧しくとも友人の話に耳を傾け、その人に自信を取り戻させてくれる不思議な力を持つ少女モモが冒険の中で、奪われた時間を取り戻すストーリーだ。

ちは毎日聞き、自分でも口にしませす。忙しい大人ばかりではない。子ども達もそうなのだ。けれど、これほど足りなくなってしまう時間とは、いったい何なのか。機械的に計る事のできる時間が問題ではない。そうで、はなくて、人間の心の

見えない状況、モモに登場する灰色の男たちという病菌をコロナウイルスに置き換え、人間としての生き方を変えなくてはどの思いに

共感するのだろうか。今だからこそ、読む事をお勧めしたい。  
(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)

この異常時に、国会論戦を覗いていると、総選挙での野党統一候補で戦うためか、政党間で異なる問題点がない、安倍前首相の政治資金規正法違反の追及に明け暮れている。確かに大きな問題だが、

新型コロナウイルスの影で注目を浴びている児童文学作品「モモ」。ドイツの作家ミヒヤエル・エンデの作品だ。イタリア・ローマを思わせる、とある街に現れた「時間貯蓄銀行」と称する灰色の男たちによって、人々から時間が盗まれてし

私が信州大学大学院で課題研究したのが「観光消費時間の創造による観光戦略」。時間戦略の着眼点で「モモ」の訳者の「大島かおり」のあとがき「時間が無い、ひまがない……こうゆう言葉を私た

内の時間、人間が人間らしく生きることが可能にする時間(略)」を参考に時間を戦略と位置付け、論じた思い出深い作品だった。新型コロナウイルスの感染拡大が世界中に拡散し、終息の兆しが



伐採作業が終わった河川敷に、どんな観光消費時間を創造して行くのだろうか